朝夷巡島記第七編 四

13
939
~~2034~~

門イ 13
文939
巻28

朝夷巡島記全傳第七編巻之四

東都　松亭金水編輯

大三十五年二月
花房仙次郎氏寄贈

續輯第七

以レ色操ニ英雄　説レ道清ニ庶民一

往昔志賀寺の上人い。碩徳悟道の大智識ゆえ。年未行ひ澄せ〻る。京極の
御息所と。面祝てより心地惑ひ。多年の勤行一時ふ虚空く。かの玉笥帝の歌と詠
ド。色の奴とゆ〻る例いどき〻人の口碑ふ傳ふ。況や朝夷い性質。殊肝金腸物
ふ動せず。義と重と〻命と輕ど。識量尤尋常ゆ〻ま。酒色と込てその心と。摶ぐ〻
ぐ死漢士ゆれども。あの手ひまぐ三十歳。血氣餘ゆて智慮と覆ふ。元未聖賢ふ
あ〻ざれば。その惑ひゆきと能ぐ。當下磐手ふ熟祝ゆふ。芙蓉の眸丹花の脣。ゆ
ま〻鬢の黒髪の。顔へかま〻在さ。朧の月ふ糸柳の風ふ素ゆ〻ぐ〻ゆ。えもいえぬ

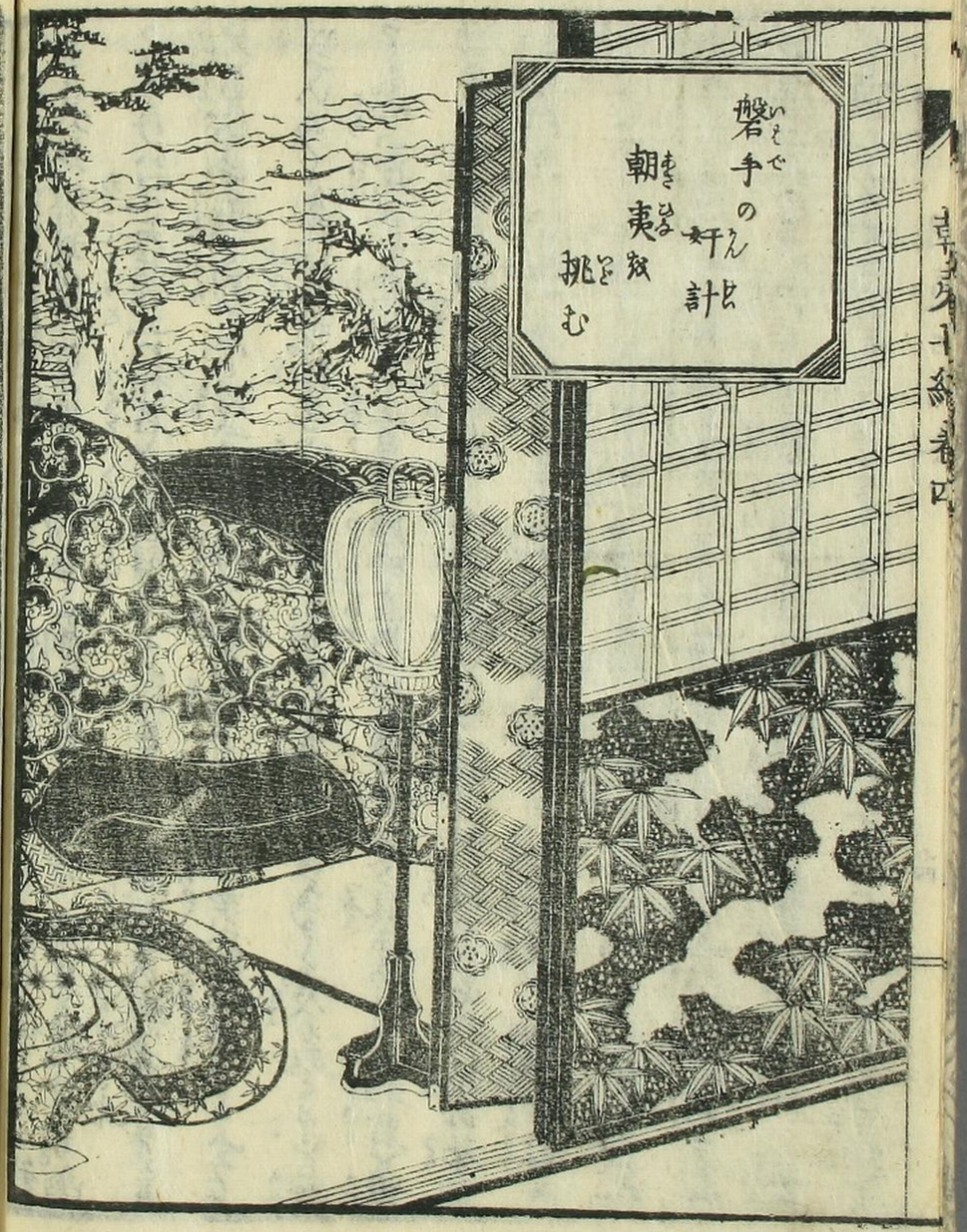
艶色に霄に遥ふ〜とりも。近倍てもるその面影うも捨がてゝ忍ひ。醉るごでく
痴るゝ如く。髪鬟とあさりゞ。忽地心をとり収ゆ。人木石ふ〜ぎれゞ吾とて情の無
うんや。然まども不義ハせゞと。縁て心ふ折ひうゝや義面怨ぎるとも。是のこん
諾ひゞこう。頻こ往孤往ぎゝゞ。自ら其処へ曳出さんと。心強くも嗜みむまゞ。怒るを
い容と改めて。義ふ勇こうふ性なりとい。平生ふ学ぶ学ぬまゞ。この願でも大こうに可きぬ
るゝんと未ぬ前こ。思ひ量まどゞされゞとて。忍ぶふ雑き心の馹の。狂ふ隨意こ浮
ま未。思ひのこけと告されゞ。猶可まぞゝ奈何ふせん。強ていそゞ然ハあれ。女子の
分こうて恥うきゞこ。秘言出可まゞこて。さそその侭ふ止ゆんや。快ハぬ時いこれ斯と。
覚悟ふける妾ゞ分のこ人。今更何と惜ゆんとのひゝ探こ己首。懐よりして把出。
抜みもゆんせゞこれと吾。吼と突んとん。是ゆんて朝夷左ふと伸。まゞ緊こ腕を。
押へて頑て顔うち祝こ。恢ふぬと祝ハ起ゆうとまゞ。覚悟究ゆ〜其方の赤心

争こ仇ふるまゞべきや。斯ゆるこ〜ハ不義の汚名。被るとゆ何ゞ厭ハん。其方ゞ願ひ
果さ〜呉んと。听て暴ふ微笑怒ゞ。仇ゆけまゞ身と捨て。忍ひ未まゞ赤心ゞ汲まけ
ゆふ法〜さゞ。始めの歎き引こて。夢ことのこゞ忍こ。忌嫌つまても猶懲ゞ已ゞ
勝ふとうちつけふ言の素多き女子ゆゞとかゆゞず編〜ゆふよ。深き心の真ふて。
君と思ふの切ゆゞて。憐まこゆ人とうち覆ふ袖ふ笛南奇の馥郁と。軒の梅ゞ香
春風ふ閨の戸漏て薫ふ弁一笹の朝貞朝風ふゆびくゞ如く綢繆かまゞ。
朝夷やこ〜ゆゞとさ〜伸べ。脊へかけて曳寄つ。解ゆゞ顔とうち成ゆ。この時怒ゞ
い情愿の。恢ふて嫉き面持こ。頻こふ笑て媚と献ゞ。愛時ありて朝夷ゞ。
忽地眼と怒ら〜て。汝深くも謀こ〜ゆる。色と餌ゆてゞまと繰り。心乱れて
正ゞゞせゞ。丈と名こうて罪ふ陷さん。その計畧ハ始ゆより。縁ゆ察〜れゞまゞ
その容とうんと思ひ。怒る心と押沉ゆて。ゞさ〜ゆゞき操言と。永く世居る嫉ふ腸も

沸かくれり。斯いふとても然ることなきど。三寸不乱の舌をもて。陳をべけれど吾は聴さだいらふといふ世の譬諭。蓼喰虫の好々と。ゆめのなかぞ是はこれ常に到るらへのことにて。未聞不見の吾と汝。今宵始めて見えたりとも。命をかけて祈までに。恋ひ慕ふべき所謂なし。そのうへ汝が面を観るに。媚を献じてことさを挑めど。心中に殺気を含みて。言葉の端に怒気彰はる。あまされいふ丸の実情なるぬとよく察しけり。猶ことふても陳ぞるや。若然らんには彼処なる。鉄撮棒を食りして骨も體も微塵になさん。宵に定めて侍女等が。物語にもゆつくん。贅刀のわど残りんすべしやと白眼つめる面魂。勇士の相貌なりしに。争ひがてつえしかど髪をもすぬ凡者なるまで星を仵まして羽をらち返さんと心を定め。思ひもよらぬ疑ひに。罪も覚えもなきものを。詈てらに薄情さよ。既に恩ひの㧞くれば。掛替のなき命さへ。捨んとしたる赤心は。眼前に竊して。駐めひしに待つぞや。凡そ害心を抱くもの。人より前にその身を殺して。他の益になりなん。加旃和君と吾儕は。偕ならざる今日始めて遭ひしものにて固り讐も恨もなし。そを奈何なれば色を餌にて陥るべき由なし。且かく陋しきこの身なれば。強に忌の人だも命を捨て慕ひぬる。是を狂ひしなりに假に色よき回答をなし。今まで辞の差におよべありまぬに怒を発せて逐ひやらんとしたまふ人に。然までに嫌ひ給ふ人といいふる因果にか。かねて語る身の果敢なき。熟情の言葉にこそ。今となりては絆なれたく一すぢに怨襟かるめと。昔の人のいふ。此処らの千回百回のよとても。和君が心の應せずは死なんと思ひ念の。何今さしに変ずべき。友放して朝夷が捕へ首尾なる如く。放さんとすれど更に放さで嗟嘆つ。毒悪を鴆は毛色の羆へしけれど毒あるとのみて人愛せん。汝頬る美貌ありて心に蛮毒を抱くこと禽なりも甚し。維くは是を真言とせん。今ひと捨て殺さべけれど。何であれは命を助く

且く此処ふ窮屈せよとのひも果さで在合る紐と揪て捩一あり。偖汝ふ問へく
まづ何者ぞ憑まれて吾と雲ん〻らのるを。実と吐給ふ助け人猶頼抵て
告ごとるく此鉄棒と喫いせん。いるふ〻とひるぐ〻。疾撮棒と淫〻と引提て眼
さ〻く突つけ。まる問と屢るり磐ひとを生懸命。その身の浮沉もとふあと。
ぶふよりて溺惑る肘り定め押沉ぬそ。滝と散める涙とまさく尚の云葉と繰
返し心強〻とのべ〻ふ非道とふふ餘とあり。と頻〻ふそと然たの。他の言未
あるとう。朝夷頭と左右ふる揮さ。そのそ〻ふやさるも要る傷のそ日間どん
とり疾く実と吐ぎや。と髪い迸る眼と睜っぎ。怒ふるる〻ん威勢ふ海雄これ
心ふも今いとり〻もとる。朝夷めの聰明膚智。その肺肝とん透されていえ
ぎとすまど許さん。在の隨意ふまるる。抑妾い城の棟梁修羅五郎と二
の者。鉄盾矢藤五ふ妹ぞり。兄ぞ山寨と退く妾とる阿武隈大夫ふ預らとてゆり

一ぞ。其後磐城の刀称ふ思ひと端ぞ〻も側室とるそ。栄曜ふ月日と送ふうち。幽
ふふきけば兄矢藤五い和君ぞ為ふ討まと。隠ともあるめ此処ぞの風ぞ悪今りとも
兄い兄いるそ敵と討てんと。ぞふめうる便とゆぞ然ふ這四陸奥へ和君ぞ下そふふう。
ぞていよ〻とそ便宜と。ゆる心地ふまるぐる。甲冑まき女子のるを〻ふ及ぞ〻と身と顔
ぞる〻心ふ歎きて在けるぞ。主ぞる四郎時直め。いるる青赳ふ具ふ〻れど。和君と狼
むるう〻あまい。酋様ふ賺ぞる〻油断と計ぞ。で一突ふ刺殺せ。されば兄ぞの孝も
ぞる主君への忠ぞ即い漢士ふ勝る勲功ふそ。その後ぞ〻よく〻寵愛厚く。歓楽栄曜ふ
徇ぞ〻べ。よく〻仕課せと阿武隈ぞ。渝ぞて頼て匕首とさ〻ん。遍與ふるまべ見ぞこれ。
天ぞ〻ぞ心と憐ぞて。兄の敵と討ぞる〻ん。孫て〻ぞ〻く朝夷ぞ〻ふ〻ふ双の勇士ぞる〻ん
い〻ど。酒と勧め〻心と乱。色の罠ぞて計ぞん〻ふ〻千ふ一〻も仕損ずる。こ〻ぞ〻ん
ふも。ぞひ〻ぞて箇のぞく。心ふぞる〻兄虚言ふて。鈎んとすまど石ぞる。ぞ〻ふと


磐手の計
朝夷奴
挑む

鏁をよしなく却て此方の心中を暁らましてその次第ふ及ぶも必ず悪の報ひなぞ。
雖と恨まんやうもなし昉め兄の矢藤五が山寨を立退とき。今より心を改めて善ふ
友ると言ますが不良の心猶已まず将軍家をさへ讒訴しなばその罪いよく重く。
首を斬て曝されても元とすと自業自得のことなれ和君を敵と讐んとれ道
ふ背けし所為と今とそ思ひあたりくすぐ兄といひ吾儕といひ倶ふ和君の手ふ掛る。
とても遁れぬ因縁なるべし。いざ速ふ首刎て憤りを晴しなへと自若と居る
在ける女子ふ似げなき兄魂を朝夷やゝ感嘆し人の将ふ死んとそその言と善
といふ汝が挙動健気なりさるゆゑも發城時直まで彼阿武隈太夫なるがひそる意
趣を含てそ取ふも足らぬ妾の身と假て害さんとそその主意更ふ解まべし。今仮
初ふ察するまべ家禄ふ似合ぬ驕奢の分野非義なる方より賄賂を貪て諂ふ
者と戸員より争論の起ましなりなると正しき撿断使の裁許あるべ

忽地ふ罪あしらはんと悪みそかる巧をなすなるべし。己が非を覆はんとて他の命を断
んとする悪むふ堪たる残忍无頼這奴等逸て鉄撮棒を喰へして骨も肉も醢ふなさ
ざんバこの欝情ハ散じがたしと歯ぎしりをなせしが忽地ふ莞示とうち笑ひ嗚呼吾なが
鈍かりき渠等いかなる故ふよりかく計らしや夫を知らでは推量りて徒ふ膽を悩さんこと
やわつまづ渠等が為体ふ心を着て初ふ着ど然るゆゑもとの疑ひてし正しき証拠なる
ものなきが囲ひかりしハあるべかりきと傍を見れバ袋戸あり。其処ひきあけて候ふ傀儡裡ふ
東西もなし。これ屈竟と身をひそめその侭其処へ入て頓て蒲團をうち被きつゝ
ひきふせバ寐らまもせバはや東雲ふも程近からん。と四下の動静を候ふふ寄ふ差
いと白くと夜ハ明方となりふなり。偖も時直阿武隈太夫湯島の三人ハ遥の一間ふ圓
居なして今ふ聲くみが音信あらん。いかふせしやと額をあつめ堅唾を呑でまそじく更ふ
便宜と知るよしなく兎角する間ふ東雲の頃となりれど猶沙汰なし。三人ハ頻りふ

呆と果て。繁々ふかく心ひさう。涙も恨みと報のんと。念凝さ。ゐれば。仕損ずるとあるべう。忽然ひと女子の甲斐なきふ彼とも利ど見もま。刹ま。こるう然もなくへ。その透なくて黙止せ。うちの二の外ふい出ど。今ま妄時ちて侍女と彼処へ遣て動静と窺せん。然ゐりくと点頭あひて俟て半時半ふ。夜全く明けまば。侍女婢女とゆ起。奥院の賓客ど目覚めるべ嗽の水望に。のく湯もまわらせよ。頻往ずやと寐惚る。婢女どもと急ぎまばいざそ。遥の回廊足音ゑ、駈ゆ死て。裡のうと侯ふふ。ちや朝夷も床のうへふ起直りゐる景勢ゐまば障子と開き其処へ入ま。賓客目覚めひ。嗽の水と進らせんとゆ朝夷答改て。頻ら持て来まとゆふ。婢女どもいまと疑戻ま。如此とゆへ時直ど他ふ汝ゐ怪。とゆふとゆなきやと問ゐけらまど。定ふ心著侍られど怪。と思ふとゆう。朝夷大人いで一個。蒲團の上ふ坐。のひぬと。ゆて心中訝ゐく思ふふ。磐くひい朝夷の其怪力の物語ふ。忍まと微て彼処へ往ま。子舎ふ潜て居ゐるゆ。嗟ゆ甲斐なゆ。とゐゐと。咳きゐゐ。繁々ど子舎と。訪きて。ゆまど。新もゐ。脱ちまる衣ごもの。その侭あまば往ゐふ。疑ひあまど然いあまと。彼処ふ居らあ。を訝。さと二人ゐ。考へて。ゐひ。ゐまるまさゆ。兎角ちゐふ。ちや朝餉の出来ゐゆゆ程ふ。然いまて四郎時直ゆ。衣服と改め朝夷と。舎せ。方へ到ま。挨拶ゐて右狂尤ゐまどゆ怪。とゆふ。爰ふ於ていう。益不審ゐれば何ゐう。讒舟影も思ひ。支ゐ安否を鬼やあ。角やあ。と案ゐて。更ふ心も落著ま。折ゐ。朝餉の膳持出。朝夷始ゐ。居まば形のゆくふ。釈て早ふ食仕ゐふ。その時ふ阿武隈太夫。敷居の傍ふ。とつきて。昨日鯛と出されゐ甲乙都て十人斗ま。名簿と捧てまゐ出。彼処ふ控へ居ま。如何ふ計らひゆん。ゆべ朝夷点頭て。今ゐ直ふ彼場所へ到ま。ひとまづ検断まべ。供の

準備とるすべしと。僕等ふ傳えられしとのひ捨て立わぐ。去未鉦城氏まろん。足下も俱ふ未ぬくとのへ時直前ふさち。頻て玄関へさち出る。者下おぐふ集令し人等。さる一般ふ礼と做せば。朝夷逸こ令る釈ま。さて夫の訴状を。懐ふして立出る。かくてまづ鉦城の郡夷志見角谷の二郷の人民且その荘の地頭なる誉田池月などの徒と。悉く召集令て訴状の趣きとりて。その旨趣と摂ぬるふ筒ふ賊首修羅五郎。経住がためふ掠めらまて。所持の本系をひざ已処鎌倉より対ふ下ま。竟ふ賊ぞふ誅ふ伏して。國中ぞ事ふ飯し。れば。元の如くふ領さんとて。隣郷のく諜じ合せ。且守護なる鉦城どのへ。そのうと訟へて。立ふ傍示の杭とおて。後巣の徴ふなさんとする時。隣郷のあのその界の。乱さるを。僥倖ふ。土地と掠め奪りんとん。是ふよりて斯のごき。争論ふい及びしり。原ぐふ理非明白ふ。先規のぬく所拶うきば。孚くいありと。何とも同じ許訟状ぬて。そのふ所ぬ弁一けまく。朝夷篤と聴定め。汝達ぐふ訴其以て猶とるし。そもく右幕下の代時ふ四海の擾乱と鎮めるひ。万民賜と稟て太平ふ飯し。鼓腹して楽むとのへど。浸い果して私欲のこあふ茶まんとと奏ぎるひ。總追補使の職と請て。一国ふ守護とおさ。郡ふ地頭と置て。その掠奪と誡めるる。然るふ當ふい迄境ふして。且廣大なるふより。往古も既ふ國府の外ふ。鎮守府と置さてり。則其例ふ倣ひて。五郡ふて一人の守護あり。それぞふ已ぐふまぞ。もるく。汝達の知る訴ぬるん。然るふ且修羅五郎ぞ。暴悪ふよりて侵さるとも。賊徒伐ふちぐふの浸い。猶先規ふ順ひて。是と領さんふ誰ぞまと。掠し奪ふのぞあん。あるとを綜の紛ふふ。他と掠めて已と倍い。賊うりも甚し。畢竟とは等の乱雑と。紀さん為の守護地頭。その職ふありるぐ。治めぐれい推て知る。苞苴ぬんどの故ぬるべ。さりぐ是と礼。その献ぎるもの不良ふて。受る者も不良なれ。俱ふ論

ざる所なり。されど汝達ふ人倫の大道と説くせん。その大道といふる道を。所謂仁義禮智信なり。仁とは恵み憐むといふ。凡て上ふ在りのは耕ざるして食ひ織ざるして着る。他人の辛苦と貧困とを。衣食とするをは不仁ふ似たり。民の為ふ害を除き。不良を禁じ善ふ孝き。老を養ひ孤獨を恤み。凶歳飢饉いるとも。飢渇の難を免れしめん。その産業を優ふ。且下の情を察して。嫌ふことなきを。めぐ。その程ふ楽をせ世を送るを。殘做さむ。その苦辛且くも休むことなき功あるを人ごとに敬ひ。そび衣食を献じて。労ふ易き。然ふ当時上ふ在りの。莫大なる俸禄。その才の栄曜の料と思ひ。権威ふ任じて民を虐げ。珍膳ふ飽後錦を。才ふ經へども足らずとせず。頻ふ貪るのみふ民を苦ふ貧らしめ下を。偽を構え巧を競ひて。で利を射ることを。旨とするを。爰ふ於て上下和せず。互ふその虚を候ふ。敵ふ在るごとく。さまざま良るをれば仁恵と云て。上より下を衒ふ似

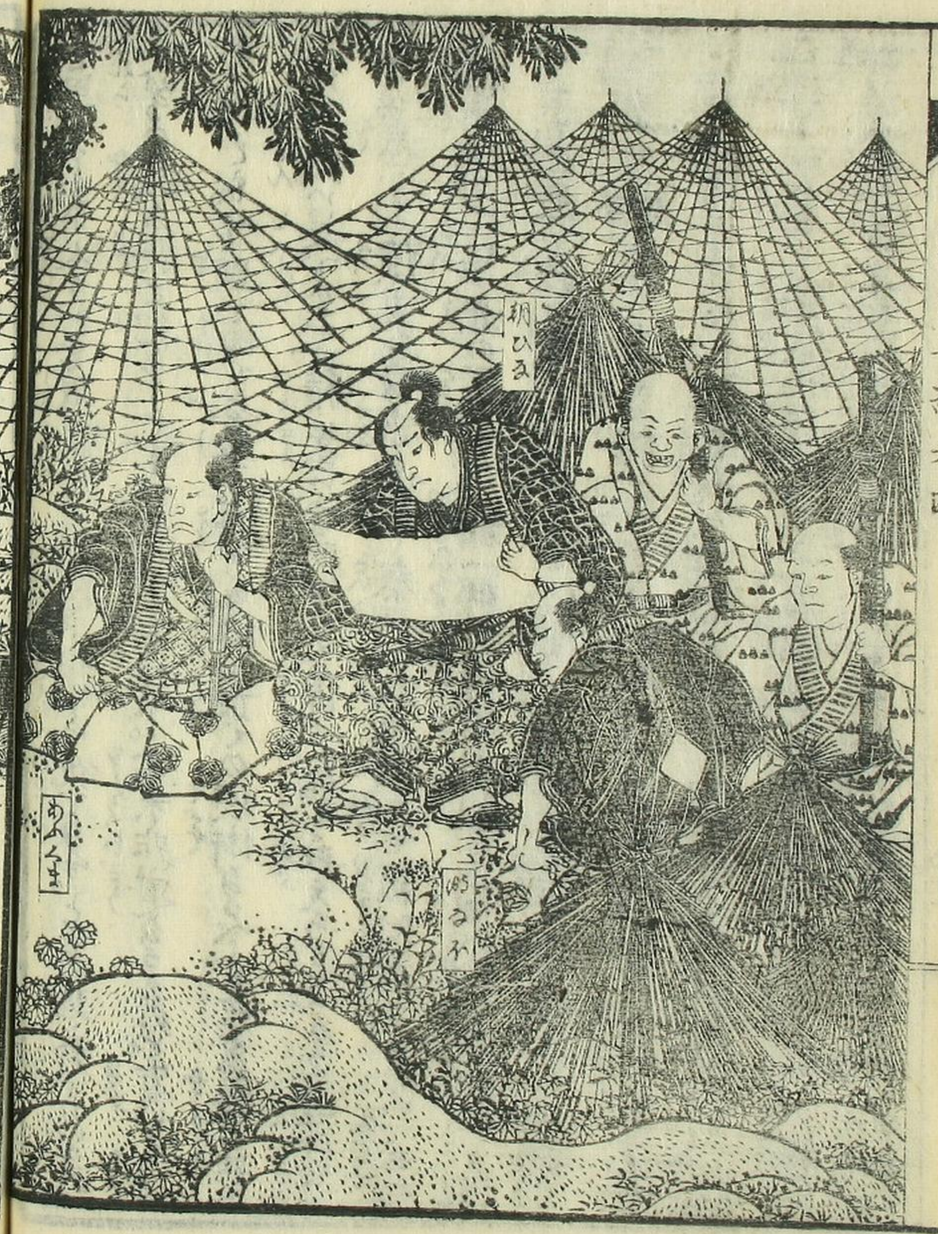
ふ。さて義い則権ふり法ふり。故ふ罪人を刑罰するも。義を存すとのみて不仁とのみ。あべての人の上ふ行ける。道ふ遺ふるのみそ。義ふ非ずば是と取ず。人ふ東西と異え物を受るも。義ふ反ふて是を做す。既ふ道田の論のごとく。先規ふ在るを各のおろふおいて初めざるとす。然るを私欲を逞ふして。人を掠めて吾利せんとす。是不義の才一なる。心を心ふ問べいふ恥ふかざるんそ。その義ふ当るや不当やと知るべ是則智といふべし。元来郷黨隣里の交り。互ふ志を厚くして。人ふ譲るを礼といふ。まことその心ふ真あり。偽りなくして信といふ。この五つを守ること。誠の人といふべきなり。然るを汝達一つをも。この界ふ入ることを。忠ふ富んことを計る。かく諍論ふ及ぶふ至りて。時ふ五常を失なふ。吾若年の才と称して。聖ふまく五常と説い。汝達心ふ烏滸とおのいん。然れども今いふ訪い。全く己が言語ふ。古への賢き人が。教へおるまてをの迹なり。吾若輩と努侮らんを恐れて。黙識るべ。

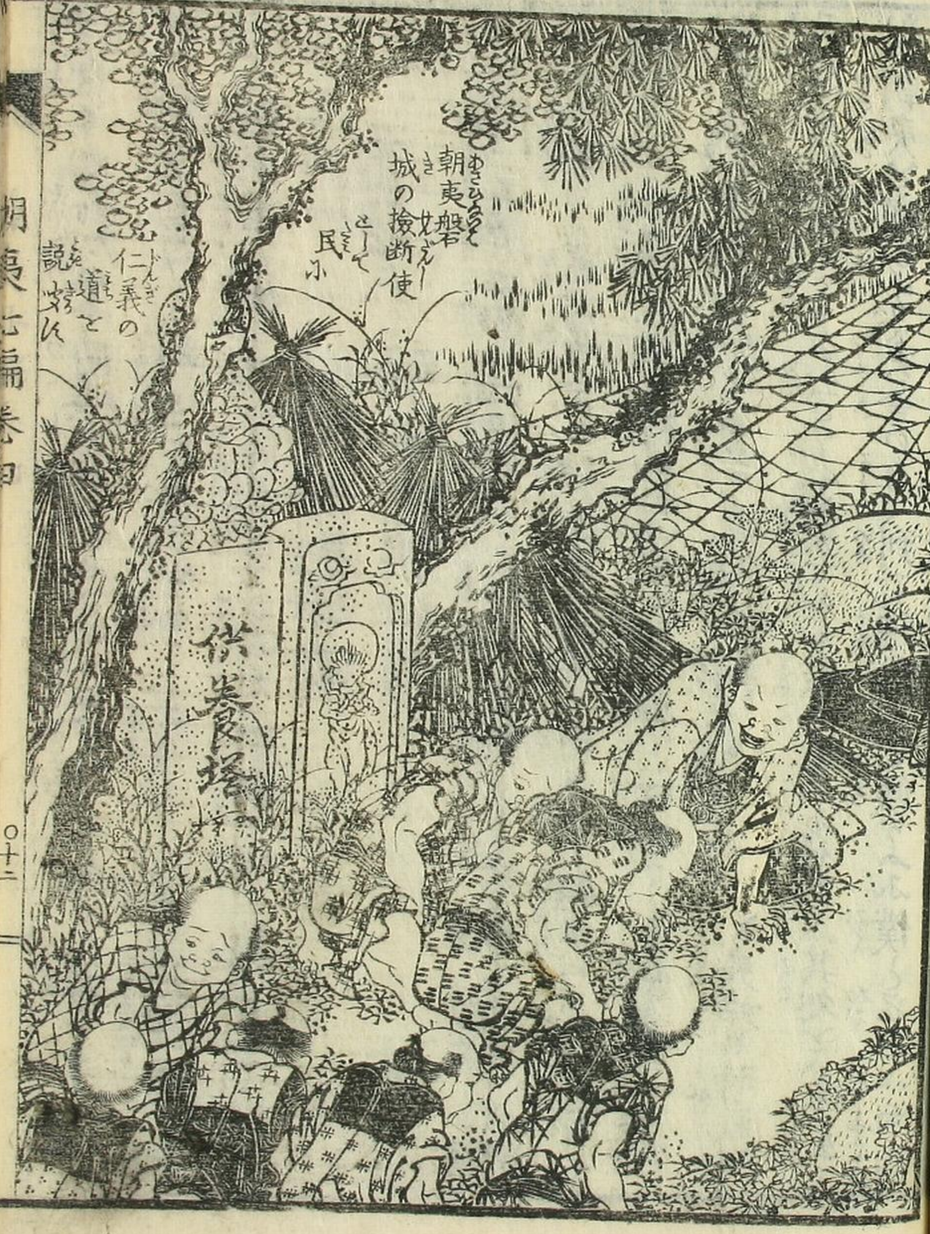
労せずしてその非を知らん。その非を知らば先規とのて田を領ち果て正さふ少し
も難きことなし。よく空うと喩さまて。其処なる甲乙口と禁ぜ空飛うじが蒼田
池月ども進えて言はう。いろふも大人が宜ふ所ハ人道の大本ゆて。是ふ起さる
とあらじ。今その理解を空ふ及びて心中忽地ふ冰解せうまま職ふ在ざら。
下民を喩さの智量なく。却て大人が言語を以て治めて覚るもいと疑うと。
と頭を搔く後方なる。村長等とさ〜招き。汝達も検断使なる。朝夷大人が
諭言を逐一ふ空つらん。言でものとなるが。守護目代などの人いろなる筋ふ
尺貝負て。ときと減し彼と増し。理を曲のふのうふ。猶下の浄ひの。日ま
ふ暮ゆて止時なる。果ハ闘諍の萌ともるんとせと吾まず押へて。検断使と
まじ請ふ他いのドと強ふ。恩ひ〜規摸の今彰なて。大人がどき理非明白の
検断使と下されふ。まず汝達が幸ひふて。吾ども猶慶べいふ汝達ま

覚ゆて。その心詞ふ従ゆや。但しい他ふ所存あるや隠まん頓く言ぜ。いろふ
奈何と問かくまば。村長共ハ踊て出ま〜田夫野人なりとも少しハ義理も
辨へたるの。ふ近年住べき土地と。賊ふ押領せ〜まてう。百ま安堵の思ひあ。
その賊既ふ滅びて。数代傳ける居屋敷田畠元の如くふあんと思ひの外なる
下知ふて。或ひハ減ド或ハまと良田と上らまその代ふ年〜水と旱とふ登少なる
瘠地と宛らる。ふ於て戸毎のめ。かそ衣食の料ふ足らも。先規のごくそれ
そまふ。割附のくぐ莫大の心慈悲なりと一同ふ守護の館へ歎きて。その
願ひとば聴入る。剰さ上と蔑如もる。烏滸のものとて外めるま甚ふきを牢
舎ふ入ろう。さまば甲斐なき農夫なりとも。と束ねて自滅と俟んや同ト余と
捨るる。守護の館へ押よせて生死と定めんとい。ふ理あり。ふ〜斯ていう
吾ども越度とるんと惶こて。今日まで駐めるきん。然ふ検断使の心下向在

アて。斯の如く宜ふい天より佐にいふものり。爭ふ違背まうすべき。嗟嬉ー是
ういふ年老ふる両親及び妻や子供と安らふ養ふとの有雑。実ふ産土
神ふて在ままそと伏洋むりのうへ多ー。朝夷いその容と況て。守護目代ふ
私ふると。豪するのめふ色ふも生きも。不小自ふるこゞ一言と忽地諾ひ無異ふ復
ちい吾ふ於ても訣び思ふとのひっ淺方と視ふて。碧城阿武隈ふうち
射ひ生と如く在下ゞ。諭ふ依て渠ふい服しめ。ままとも渠ふう所持ふ良
田と奪ひて水旱の憂へある田とそまふ換ふ。元来不良の族ふあるまど。守
護目代ふる足下ふゞ指揮ふ因て所勢ふるふいえや已ゞ東西と思ふ。然
ふと今まふ改め易てうや先規ふ復するふとも奪ふまふ如思ふのいふべて
下愚の常情ふて或ひい已ゞ非と顧も遺恨と含む族もにふ。まふ庄来の
爭ひふべ。喻へていそで盗人ありて。他の東西と把獲ふときいえや已ゞ東西

と思へて。本人とと取戻ふと。怒ふ恨ふて仇とふす。とその理分ふのえば。
支ふの族ふ物と把らふてふゞ其心と宥ひべ。元来非道ふるめと。宥ひる法い
あれとも。で理と曲てふ事と計ふも。時ふ取ての便術ふるべ。そその族ふ世ふ
べ。米銭い足下ふゞ積蓄ふる所とふで。節ふ頒ち與えらまよ。ふる時い足下
ふゞ恵ふ懐きてふの末も。永く泰平と致ふべ。凡そ一国と治むるのい。一郡
民富とりて。已ゞ身の富とす。一郡一郷と治むるのも。その理ふ於て変らべ。
いふその意と況ふ。ふうとふひもうぬ義秀ゞ。捌きい尚ふ守護目代ふ。苞
苴と受て私ふる。その金銭と再本人へ返さまんとふふ。阿武隈ふ。ところも
つふ。物といえんとあふし。と磐城い怜悧漢ふ。ふも朝夷ふ心中と。粗ふ察ふる。憖
ふ。拒まべ。是ふう賄賂の筋見ふて浚雑の。忍きふと思ふゆゑ急ふ阿武隈ゞ
袖ひき止め。その身忽地進ふ出て。帥する処逆一ふ。義ふぬと回答けり。ふ於て朝夷い。


朝ひる
あかつき
ゆふべ


朝夷奈切通城の撿断使
民ハ
仁義の道を説ケル
供養塔

村長そして其所の御図帳と出さそろ。さて下司と呼集舎てその由をさ〜示し。形の如くふそ〜へ割渡さべきことを命下。堅城三十六郷の詳論一時ふ果〜ゐ。朝夷心中ふ欣びつかの時直弓と先ふ立。旅館を作てゞ帰アをける

續輯第八

再揮佞者拙謀
且勝奸智舌頭

于茲湯島沸太郎い時直弓と商議して。磐ひろゐと假て戈秀と。刺んとい輙〜と出ひ居ゐふ計らんや。その翌の朝ふ至アて。朝夷い恙ゐ。却て磐ゐい何地往けん家の内ふあゝぎといふと笑て心易ゐ〜も右衣左ゐ思ひ苦せど。其処へ見つヨ出べきオゐ。潜こて物と思ひけるふ。朝夷始め時直阿武隈その餘の人こゐの出さゐて。館のうちも寂やゐゐふぞ。密ふ其処とうち出て。かの朝夷と宿ゐる。奥舎のきへ到アて。裡のやうと候ゞふ。僕と出ゐく一両個。

ゐち成アて居ゐ動静ふ序悪しと立戻アて然ゐふても殺ゐう在所。彼処ゐそ〜まと他へ往べきあゐいあゝぬ苦ゐ。いゐふもゐて探アて見んと。ゐくゞ僕ゐぶ在ゝきゐいゐ〜都合あゝゐゐ。こふふ殺城の庖厨のこを賄ゐふ男の貨助ゐ。日未ゐうして心利ゐ。まゐ渠ふ心ゐさうて。洋と図らばいと安〜と腹裡ふ計数て頃で厄助と密ふ招き。耳ふ口傳せ如此〜ふ計らくよくらひりまゞ殺助忽地諾ひて。倖ひ昨夜の残の殺ゞそのまゝふて種こあゐ。在下よ紀ふ計らひてんと丈ゐう暴下男の甲乙と促して。美味珍膳も大かゐふ盛ひゐまゞこの種ことゐ齎して彼方へゆゐ。朝夷ゐ出ゆきて。逆と成まる僕ゝもふゐち對ひて莞爾やゐふかゝ川院の留守居して。さて退屈ふ在ゐゆゐ。たゞ日中ふも程ちゐけまゞ聊殺と調ゝゐふ。一盞と傾けゐ。僕平生ふい庖厨のこの閑しきゝふゐ乳も甘ゐん。越ゐふ今日刀称も出ゐて。汚暮ゐゞい帰りもあゞ。まゐ丈ゐゞ邂逅の非番。

身をもて献酌す。霎時ありて、もゝんとゝゝ去来甘きて給へ、ゝいひて其処へ押並ぶるとゝ。僕をゝ元来ある日。殊ふれ背の折るれば、ゝ歓ぶて大方ゝゝ。舌ゝちまて傍へゝ添ひ。さゝば食應ふ頂ゝんと頓て盞と把あげつ。ゝ順盃も初めのうち。たゝや三四分の酔心地ゆい。不覚ふ興と覚えつ。心任せふ飲ゝふ。主客忽地十分の酔と殺して多くの。戯言ゝといひ散し。時移るまて酌ゝを。貸助い猶頻ゝふ勧め。ふれめでい興ゝと。茶碗ゝとりて来ゝて。勧むるまゝふ僕ゝもい。嬉しきとふ。ゝひい。量ゝもゝまゝ飲むふゝて。泥のゝゝふ酔湯け。ゝのゝ肘と枕ゝて。前後もゝまゝぞゝち伏ゝ。程ゝてよけまゝ貸助い。沸太郎ふ如此ゝゝと告まゝ湯島大ふ歓ひ。則ちまゝふ来ゝて彼方此方と探ゝゝるふ。果ゝてゝるゝ袋戸の。裡ふ何やゝ物あゝゝ。此処ゝんゝりと押開くふ。器ゝもいゝを足と縛されて。口ふい布ゝて猿轡をゝけらまて

暗ゝとる。湯島をたゝやく曳出し。椽の傍へ抱き来て。猿轡と外ゝ縛の。細紐ゝを解すて。在あふ酒と茶碗へ。次てまゝ一口供ふる。盤ふい器と飲干て。渾身亀まゝ胸まゝ痞へて。四下と眺るのゝ言ふふ。かゝて湯島と屋ふ助い。左右ふゝちて引起ゝ。ゝと牽て徐ゝゝまゝ渠ゝ子舎へ伴ひ。湯漬飯ゝを喫ゝるふ。漸くふて人心地の。著ゝやゝと。ゝるゝ。四面の障子と建きて。湯島い声ゝち潜め。そゝの容と尋ゝふ。愛ゝふい屡吐息吻き在ゝゝまゝと。箇様ゝと。物かゝゝ歎息ゝて。頭とゝふを擡げ。面目ゝきゝて。あゝゝゝ推量ゝて湯島ふ。ゝん。ゝ壮夫ゝて。あゝんゝい。ゝゝき恥ゝものゝべけとゝ。元来甲斐ゝき女子の身仕損ゝゝ。ゝのゝき。辱めと受ゝるも。失策ゝいひゝ。猶まゝ計ゝふ術も有ゝん。ゝゝゝ。心と強めよ。ゝゝ。ゝゝい頭と擡げ。妾女子の身ゝとりて。勇士と敵と窺ふれば。仕損ゝてかゝる憂目と。ゝゝるも。ゝて。ゝての覚悟ゝるゝゝと。聊かゝゝふ

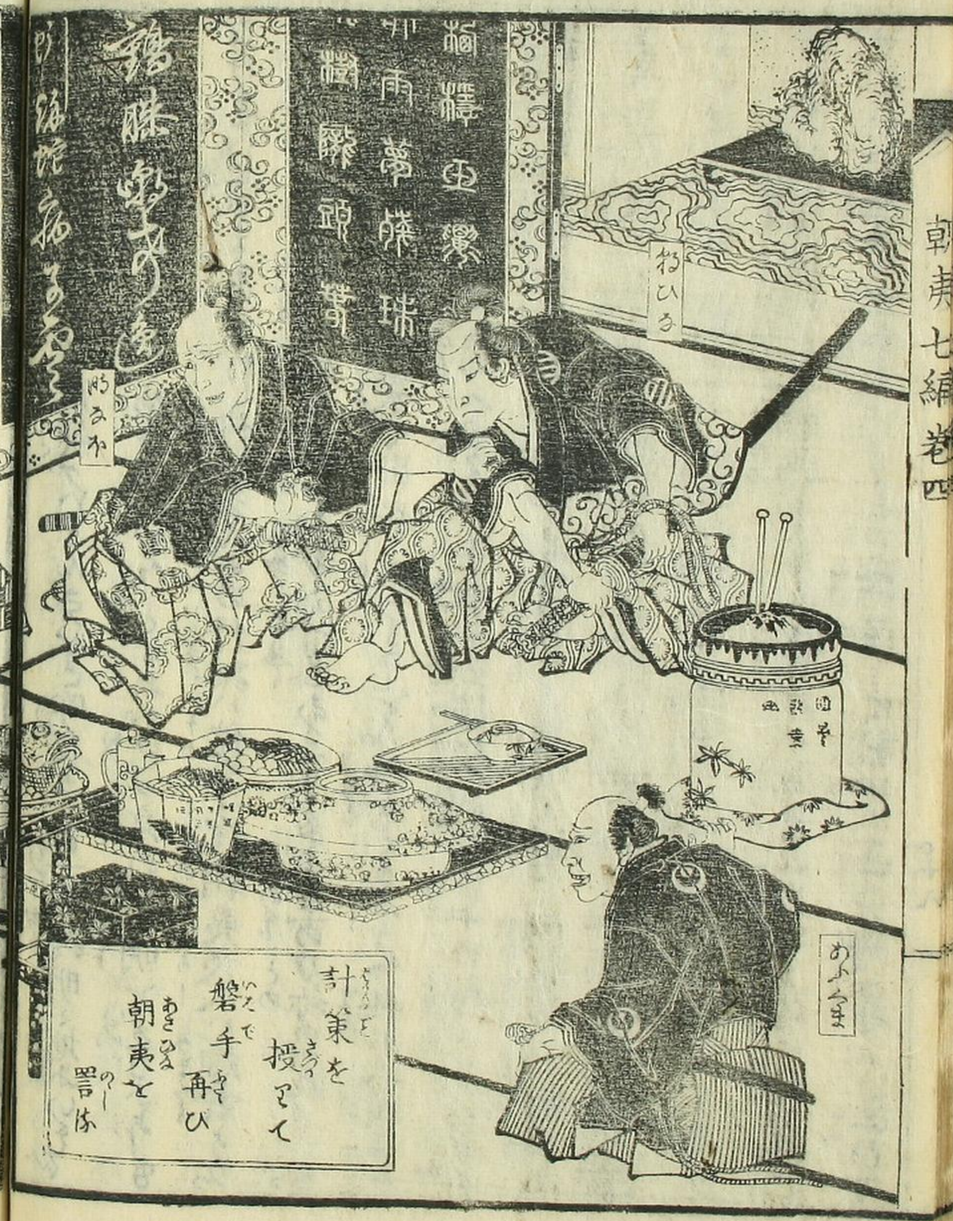
たゝねと彼人は慮ひの外なる聰明なりて忽地ふ腹の裡とゝ透され問ふ処失ゝと駒ふあるとてこの久い陳するとも許されゝと思ふふとりて在の次第逸て明〻地ふ言ふくば何笘の故くも分がけとゝ後の穿鑿の種なれば縛揚て彼処へ入れ猿轡ゝ懸らるれば物いふとも為ずして其儘死ねと思ふても夫も〻已がまゝ為も強面命存生て悔きのこう今かりへば刀称ゝちの計策ゝ明せてのいと悔あり只恩ひくゝ今あて妾と殺して渕川う然なるゝ人なれば骸と埋ゝその隙と隠さゝめくするゝば妾が刀と証拠ふ刀称ゝち害心ありといふとも然るゝと頼抵ふの証拠とせるゝと絶てなけまゝば朝夷も術なるゝんゝゝ牙あるゝて熟ふ道なる道のゆゝ去ゝ殺ゝゝと牙と抛伏てゝち欲くゝと湯島佶と又終ゝ忽地ふ掌と拍てゝ浮い矢藤五ゝ妹ゝゝ雄ゝあき挙動感心せゝ然るとゝも長いこれゝその証と消ゝのゝあゝて益とゝる所なるゝまゝゝん牙も兄の敵眼前ふあると見捨くゝ死ぬとゝて本意とするふや勿論朝夷の惶ゝゝふ因心ある刀称の容事とゝゝ明せゝゝゝゝ女なるゝも比怯なる挙動なりき然るとゝも洩せゝゝゝ駟も舌ふ及ぶぶといゝ今ゝゝふ何とゝゝん然れば此処ふて死なんと思ふ命と存生なるなる大望ふ果ゝゝゝのゝゝふ妾城の刀称ふも雖あゝゝゝも全き計策とゝゝんとする心のゝゝゝいゝと絶ゝゝと必て無ゝゝい湯島の顔ゝゝ戍ゝて夫ゝゝの計ゝひあゝば可惜き命といゝゝ捨んとゝゝぶき開いまゝいゝゝる便術ふゝ妾が刀と成ゝゝ教へゝゝゝ須計らんと膝ゝゝりまれば溝太郎ふ故意と呵ゝとゝゝ笑ひゝの便術種ゝあり然るゝゝゝゝん刀が如く心弱くて何とゝ為ん長い苦肉の謀計とゝ輙く行ふべきふあゝゝ教へゝゝゝゝ詐るゝゝゝり死ゝば死れ命惜くゝ存生て証ふゝ自ら笑ひと招きゝゝと暗ふ励まゝゝと言ゝゝと少て鮮いゝゝい涙と流

ありて。妾為ふ甲斐なくも。太平を洩せし科あるべきまこと如此ことをこそ思へれど。今は弥覚悟を究めて。身は亡ものと心は決し。願くはその為様と示しなくと切ふ請。その面魂女子なれども。思ひ詰る景勢なれば。湯島は点頭でいなく心の決しなば。教ふるふるど雑うるべき。昨夜は色々誘ひされど。渠多くはその人と食も。這回はそもと表裡して。筒様こふ計るべ。当下必らも頼抜て。昨夜のこと言募ることも。偽りと言消あて。あん分ならべきことのと。言立なば渠怒ることまもくもんなと。言る時ふ時直阿武隈ふ如此こるもなば渠威勢忽地ふ摧けるる然もなくく。我を張て狂ふるる。若狂ぐその座と去らせば。所で両段とるるんの。渠何だりの術あることも既ふ此方ふ多勢あり。殊ふは酒と強飲して。計らば何を仕損ぜぐきはるるや知れあるまじく魂と居るふあるぞ。克ぐこと示せば。終ぐとは具ふ畢ることを夫ふのこといと易

うり。刀称ふるるくそのふ筈の差はぬやうふもん分るる。語ることと言ふを。開は此方ふ泥濘はる。定ふ心は謀るべ。と密談時と移るるどふ。秋の日陰のやう傾ふきて。晡時とるるふけり。彼朝夷が番守ふ置る。下奴ふは此頃ふや。酔醒て起あぐりさそも屋助ふ馳走ふ。ぞひの外ふ太く酔る。見合とえまば申刻は過ぬ。刀称ふ程ふく飯とるるん。杯盤とるる収めよと云いのぐことまご酔の。篤と醒わば浪こと。院のうちふ散しる。東西と庄倚ふこるふ。外の方暴ふ噪ぐるる。皆飯つぐふといふ。客ふ。其処へ駆ふる則美秀先ふ立て。こまふひろ副ふ愛城西郎。阿武隈大夫も後方ふ在ふ。折ることるる玄関へ馳出ふ輩ふ。當所の知縣岩渕作理。芋瀬並六ふを始めて。這回の條ふ加ふ合る。上下の官吏七八人ふ立一容ふ並居て。その労と謝し且今日。朝夷大人ふ教諭ふるりて。ふるめ倫一時ふ決し。庶民安堵の思とるること。五ふ於も

この上なき慶びゆていうまでもなく。高より此館ふ待受へ心斗の東西と捧て。大人ゞ恵心と謝せん為め。去未と此方へ来ると。先ふ五ツ移城が館のいと廣らうる書院へ誘ひ。まづ上坐へ義秀乃と。居て尊敬。その容さまふ他支安いうんのうめ〳〵この頃の人心ふい油断なるまじと。朝夷いまき程ふ今釈と做て今日い終日。労きてるふ彼処へ往て。休息うさんと外と側つると。作理芝六五ようて。まづ〳〵要時と推駐め。果敢けまでの捧物と。今奉る所なり。這ふ在下弟ゞ寸志なるとと。往やらまでい強ふ固く辞するも。元郡の人ゆまて善ゆのうむと思ひて本坐ふ復ると。弁一小性童と始めて。阿武隈なるとの奉走して。持安ゞ珍膳美味。所せきまで並べて。朝夷いとまとうて。這い殊ゝ珍走多在下酒い嗜めども。酒菜い常ふ三種の東西とて足ぬ。海濱ゆ程近ゝ〳〵ぬふかく鮮けき魚ゞもと需めるふと分ゞ。下ふ費を所為るべ。却て心ふ快〳〵と苦笑ひ。当下ふ四郎時直い衣服ゞ〳〵着更てゆく出来り。大人よ然のゝる言ゆひて。這い知縣ゞ志と表をまで歩いるゞ。辞ゝるふ本志なるらん。去未ゝ献酌めゝと已まず。酒杯と把あげて朝夷が前ふ居て勧むるゞ。義秀乃ゝ固辞ゝひて杯とうけまべ。傍て儲の侍女ゞ粧ひ装まて前後ふ立ち。酒菜と挾ゝ折敷ふ載て。一個ゝの前ふかくゝふ於てかの作理芝六い前ふ進ゝ。自ら酌とうて朝夷ゝ及び。駆城阿武隈ふ進めり。かくて程ゝ暮ふ及べ。例の銀燭と點〳〵列ねて。酔飲時と移すまふ。ゆ戌刻ゝ覚ゝ頃。傍の隔紙颯と開き。蕭然〳〵ゝて出る人あり。這い誰ゝ〳〵と一座の人〳〵見るふ。見ゝ〳〵ん磐城の愛妾。駆ゝ〳〵ん髪とふり乱。紅粉とぶふ粧ひ。ゆ色青ざめて十分ふ憂と含ミ〳〵景勢ふて寥〳〵と衝立ゝり。人〳〵ゝまと視て怪しむ所ふ。阿武隈佶と視て声と励ま。汝淫婦何

方へ往さる。昨夕朝夷刀称と歓待て。その後い弗ふ居らど。館の隈こ求め飽倦渠定ふ密夫ありて。今霄賓客のこの紛まふ。走ーるん然いれ。怒城の刀称ゆい汝とのひ吾も平生こ鵠恩どうけるとも顧こど浩不良の挙動ありて。その後何の顔ありて。人ふ面ハ合せんとう潟ふ長き秋の夜と。間睡ともあらじ。何方へ往て今まで居る。まこと其上ふ賓客と。歓待席へ案内もあらで。桃ふ乱まて寐こまと髪と。把揚もせで。臆もせで。如ら鳥滸の挙動あり。頓こ下き疾ゆらむやと。朝夷怒城と尻目ふうけて。二歩高く豊言まで。岩渕芋瀬と始めと。興醒自ふ瞻望てとり。當下怒ゆい徐こと。怒城が色へ坐とあて。阿武隈大夫とえかへまつ。綽釈ゆらーるわが。然宜ふも無理ふいあーれどこまふ容子のあきとうい妾陋ーき賤女の。即操後ぎ気いあーるとも。かくまで深き思心とうけ。何と不足ふ異夫で。重ねて身とや匿まべきとありいそで猶疑ゲいまん。さるま昨夜うの一始終。明こ地ふいそで。この席ふ面伏ある人ゆらべく。いそでとすれば已が身の。証明と立ふ。ゆけまば異代まぞまうし侍まるん。その仔細ハ他ゆーど。朝夷大人い縁会ゆう。使のことゆれば。敬ひ冊き奉ま。努こ疎畧あるべうぞと。主の刀称のゆれくも。令畏こ酒宴の席の。果て卧房へ入らまーとう。侍女どもふうわ任ま。祓ゆき條ふもあーんえと思ふふりて子舎と出。彼処へ到ま日中の程召され衣の前後も。心着んと泰ま。ゆるふ。ゆや侍女ゆい其処と退き。朝夷大人い卧房ふあり。妾が往ーと僥倖ふ。咤注めてこの頃の長途ふ足と太く病ま。腰と捻まて。こーせんやと宣ふ。ふ否む術ゆ。傍へ倚て脚ゆどと。揉摩ま。ふらする。その折忽地起上ま。腰捻まて。こい當座の計畧。実い汝ふ国の伽とうさせんとその為ゆるぞ。去来。ここまと横陳ーて。旅中の憂と晴させよ。とゑひも


いとぐち
いとぐち
いとぐち
計策を授けて
磐手再び
朝夷を
罵る

うけ丸雑題ふ。嗟やと胸い噪げども。十五の處女の如くその侭逃んもうゐ
ゐ。然いとて深く慙ぢあるべ。怒るかんとても恐まこ右左回苔も口隱ゆ
う。その意ふ従ぐべきうゝねべ。オと逡巡てその仰いと有難くい待まども。
妾ハ既ふ慇城めふ恩と稟ける者ゆ。その出詞ふい頂ひぐて。努て君を
嫌ふふあゝれどこのとのゝハ許と願ひまつるといへども許さだ仁王の如き腕突
出して。妾が袂と緊と掴へ汝ちゝぞや吾ハこそ此陸奥でも鬼神と武勇を
称へらまて才ゆり。まと鎌倉ふ誰むらふ和田義盛の三男ゆて権貴も惶ぬ
英雄と。人も誉吾も誇ふされど思案の也とらい。汝が色香を愛想ひ既ふ
泄せ一言と仇ふるすーも為せんや。緞令磐城の側室ハのゝ実の渾家ふあり
とても想ひ詰る一念を翻ぐまぐべき吾ゆゝぞと時の権威と勇力とと。鼻ふ
挂る面憎さふ。振きゝんとゝふ思へども。羅綾の袂と切とかく。七尺の屏風躍

るふゝるく。猶躊躇てあるわどふ力ふ任ー引倩て。辱ちめんとーるふ故今ハ
辞するふ所ゆゝ。不虞の備へふ平生とより。収むる所の懐劍と。早く抜んと
ちゝーと。見さ人敢ゆく扱とゝまと。女ふ仇げるき又物三昧とまふい深き故縁
あゝん疾言ゝと責られても固より巧めるとふもゆゝねべ何といふべき羽もゆく。
弱つ果る網の魚のごと交野の左鶉夫や恋ーと思ふのく朝戾大人を
怒るふ沼塢を在ゆふ縄ゆて回こと胸さ苦まさ人搽まつ。伏戸の戸とかー
閉て中へ突いまと剰さ人猿轡まで挂らまて物りふてもゆゝ柴の葉末の露
と命さ人消も入ゆん思ひゆて。夜ハ明れど許されを。検断ふて出往ゆふ
迹ふハ下僕西三個夫とゝゆふ番とさ人附らまされば辛らじて逍まと出べ人やう
もゆく半死しる思ひの折ゝ。かの番人の下僕ゆゝや酒嚥と催しつ。後ふ各
爛醉して前後もちゝず伏るゝ。願ふてもゆき僥倖と。足の先ふて伏戸曳

あけ。まづ其傷とび逆もとるがごとく。渾身痿痺て動くまじ。故ふ皆く子舎ふ潛こ。稍人心地着をふりいでその侭止まんとおく参つて侍るる。貴るる人の善らぬうと言をいくとも烏滸る所為ゆそ。後の崇をもいろならんと心痛めて侍まども。ゑ身の証とをさきふ在の隨意と言する。其処ふ在もる朝夷大人も悪くるを把をひそと真偽ら交て。満坐の中ふて泣つ笑ひつ。言えらまて朝夷い持る盞礬と投捨眼を睜アて怒くの方とうち白眼て声と荒らげいるも仔細の不審ーけまとび後ふ搦て袋戸へうち篭さい実ふ然るり。その餘い汝らいふ所。僉表裡る食言ゆそ。言と巧こふ吾とうて。猶不義の徒ふるうんとする。その謀畧い誰教ーそ。まづ時直め阿武隈大夫い別く逐一聴ゆそ。餘の人もその幸ふ。聞ーしるや否いるーれど。座の不肖ふ猶聴べーるれ一件いふとあり。昨夜人定の頃ふ及び。嬬婦来つてうまとを挑む。その情頗る虚言なれば。假ふ惑へる面持ーて。猶その容を窺ふふ果ーて匿せる匕首故ことあまと責問ふいるる條ら主人時直阿武隈ら謀計と。吾ふ教へて刺客とうあと。緯月地ふ首伏せり。加之夫るる嬬婦い先ふ七び鉄肩矢藤五重連う妹ゆそ。吾と敵と寝ふう。具ふいひーい偽るーふ。開い公の道理とあるそ。怨むまづき者と恨む。匹婦の一念許ーもすべ。幹かるく鮮ーるこれい。足下ら何の趣意をゆそ。吾と婦女子のもと假て害さんとい做ーるそ。忍ばるれ挙動るり。斯詰らい然るこい。決ーて非ずと陳ずべけまとび。嬬婦い慥の証人と。縛めきーを下僕ら懈るり。逃ーるれど。猶懲ずまふ。陷まんとあく来ーん夏虫の。火影ふ命棄ふ来る。挙動ふ髪方髪ふり。将来その次第と兼いーんと。問詰らまても時直い。尚ふ湯島

と密談して。思ひ儲けーとされば。些も膝まぢ呵こと。冷こ笑ひて童犯
ぞちぞ。喧嘩でれ言とりて。詰とのふで笑止ず。吾くいふ懦ずーとも。
足下ふ太き怨ありて。害さんとを欲まるず。爭甲斐ずき安ふ託さん。
鬼神ふもあず梵天王の再来ずりとも一個の人ず。吾ととても壮夫ず。
必死と究めば何とう怖さん。然ゆあまぞ朝夷大人漫ふ些の言をふと
設けて。威して入口と閉ぐんと。計らるとう酒呉の戯事。ず流してよと宣ふ
こて。天晴直ずる氣象いなえて。特毋敢こていずとと。冷こ笑へば朝夷。
聽ふ沼堪ぞ膝とて歩ー。斷て做ーてぞ居とりける

早稲田大学図書館
011888007492